

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：14601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870430

研究課題名(和文)きょうだい間における対乳児音声に関する研究

研究課題名(英文)Communication between Infants and Their Older Siblings

研究代表者

中川 愛 (NAKAGAWA, AI)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30446223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、乳児きょうだいをもつ年上きょうだいの語りかけについて調査をおこなった。一つは、児童きょうだいの乳児(生後1か月～生後24か月)への語りかけについて縦断的調査を行い、乳児の加齢にしたがってどのような特徴がみられるのかについて検討を行った。二つ目は、3歳児と乳児きょうだいとの遊び場面での発話について調査を行い、3歳児が乳児とどのように遊びを展開しているのかについて検討を行った。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this study was to investigate developmental process of communication between infants and their older siblings. Two topics were addressed in this study：(1)1 to 24 months of age, was videotaped in free play (toy-play, pee-a-boo game, book reading session) with their mothers and with their older siblings. The data was recorded in longitudinal studies；(2) the 3-year-olds' verbal and gestural input to their mothers and toddlers at the play song and book reading session, with a sample of 3 pairs of older siblings and toddlers.

研究分野：家政・生活学一般 / 子ども学(子ども環境学)

キーワード：乳児 きょうだい 発話 行動 遊び

1. 研究開始当初の背景

大人が乳児へ向けた語りかけには、大人同士の会話で使用されるパターンとは明確に異なった韻律的パターンが使用されることがわかっている。その音響的特徴は、大人同士での会話音声に比べ、基本周波数が高くなる (McRoberts & Best, 1997)、基本周波数の変化範囲が広がる (Fernald et al., 1989)、発話速度の低下する (Fernald & Simon, 1984)、語尾の上昇パターンが増加する、繰り返しが増加するなどである。それは、motherese や infant-directed speech (IDS) と呼ばれている。

発話内容の特徴として、母親は、子どもがことばを話すようになる前から話しかけ、子どもの声を代弁すること (岡本, 2001; 2008)、乳児が自分の行動の有意性を理解する前から、乳児の行動に意味づけを行うことがわかっている (Adamson, Bakeman, & Walters, 1987)。日本語の IDS の特徴としては、「わんわん」「ぶーぶー」といった対象物の声、音、状態などを模倣してできた擬音語擬態語 (オノマトペ) や、「おてて」「くっく」など成人が使用する語彙とは音形が異なる「育児語」が多用されることがあげられている (村田, 1960; 友定, 1997 他)。また、「わんわん」のように反復を伴い、「-」「ん」「っ」といったいわゆる特殊モーラを含んでいることが多い。早川 (1981) によると、音韻の反復は音声操作の獲得において、擬音語擬態語はシンボル形成において重要な役割を果たすという。また、成人に対する話し方に比べて IDS は、オノマトペが高頻度で使用されること、動作そのものを表す語彙としてオノマトペを用いること (宮崎・岡田・針生・今井, 2010)、特殊モーラの出現率が高いこと (田嶋・田中・馬塚, 2008) などがわかっている。

養育者は、子どもの加齢にしたがって、育児語から成人語に転換することがわかっている (小椋, 1999)。その時期は、22 ヶ月から 26 ヶ月という。このように、養育者は、乳幼児の発達に合わせて、言葉かけを調節していることがわかっている。対乳児音声についての研究は、養育者を対象としたものが多く、育児未経験者を対象とした研究は多くはない。

筆者はこれまで、小学校から大学生を対象に、対乳児行動・音声の研究を行ってきた (中川・松村, 2004; 2006; 2007; 2010)。その結果、対乳児音声については、音声の基本周波数の上昇、つまり声が高くなるという特徴がみられ、IDS の出現傾向が認められている。しかし、その特徴は、母親などの養育者とは異なり、特に、乳児との接触経験がない子どもたちは、乳児の名前を呼ぶなどの「注意喚起」はみられるが、その他、乳児への言葉かけはほとんどみられなかった (中川・松村, 2006; 2010)。乳児との関わりを終えた後、実験協力者に感想を聞くと、どうしてい

いのかかわらない、何を話せばいいのかかわらないと答えるものも少なくなかった。また、保育士養成大学に通う学生を対象にした、乳児保育に関するアンケート調査では、乳児への関わりや言葉かけに不安を感じている学生が多いことがわかっている (中川, 2010)。

以上から、乳児との接触経験のない子どもたちは、乳児とのやりとりの方法がわからず不安を抱いていることが伺える。現在、核家族化や少子化がすすみ、多世代の同居が減少している。平成 23 年度の第 14 回出生動向調査の報告では、完結出生児数が 2.0 を下回り、家庭内にきょうだいがいない子どもの数も増加している。そのため、今後も乳児への関わり方に、不安を抱く人が増加することが予想される。

一方、乳児との接触経験がある女子大学生の乳児への語りかけは、母親と似た特徴をもつことがわかっている (中川・松村, 2010)。また、乳幼児のきょうだいをもつ子どもでは、自分より若い乳幼児に対して、大人に話をするときより単純な文で話すこと、発話が短く、繰り返しが増加すること、乳児への絵本の読み聞かせ時の音声は、ゆっくりとした読み方になるなど発話形式を変えることが分かっている (Shatz & Gelman, 1973; Dunn & Kendrick, 1982; Weppelman, Bostow, Schiffer, Elbert-Perez, Newman, 2003)。

このことは、親になる以前に乳児とのやりとりの方法を習得できる可能性も示唆しており、現在、乳児への関わり方に不安を抱く子どもたちの問題解消にもつながるといえる。しかし、子どもの乳児への語りかけに関する研究は、あまり多くなく、事例を増やす必要がある。乳児にとって、前言語期からの他者とのやりとりが、乳幼児の言語発達やコミュニケーション発達に重要な意味をもつことがわかっている (Jacobson et al., 1983; やまだ, 1987; 鯨岡 1997; 岩田, 1999 他)。以上のことから、本研究では、きょうだい間の乳児への語りかけの特徴を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の目的

本研究では、乳児きょうだいをもつ年上きょうだいの語りかけの特徴に焦点をあてる。一つは、児童きょうだいの乳児への語りかけについて縦断的調査を行う。乳児の加齢にしたがってどのような特徴がみられるのかを検討する。二つ目は、3 歳児と乳児きょうだいとの遊び場面での発話を調査する。3 歳児が乳児期のきょうだいとどのように遊びを展開しているのか検討する。

3. 研究の方法

(1) 児童きょうだいの乳児への語りかけの縦断的調査については、1 組の 3 人きょうだい (長女、長男、次男) を対象に調査を行った。対象となった家族には事前に研究内容を説明し協力の承諾を得た。調査時期は、次男

が生後1か月頃から、生後24か月頃までとした。観察開始時の長女は8歳5か月、長男は6歳5か月であった。母親に、姉兄が弟と関わっている日常の様子をビデオカメラで録画してもらうように依頼した。録画映像の切り替わりを1場面として分析を行った。まず得られたデータから、年上きょうだいの発話について、発話機能カテゴリーの分類(中川・松村, 2006)、育児語カテゴリーの分類(村瀬・小椋・山下, 2007)、擬音語擬態語の分類(丹野, 2005; 石野, 2007)を行った。

次に、調査期間内に出現していただいないいなばあ場面、ままごと場面についての発達の変化について検討を行った。いないいなばあ場面については、生後7か月～生後20か月までのきょうだい間のやりとりについて、各場面で出現した視覚的消失の手段、「ま」の取り方、視線について行動コーディングシステム(Beco)を使用して分析した。また、各場面できょうだいが発した発話を分析した。ままごと場面については、生後15か月～生後24か月頃までのきょうだい間のやりとりについて、やり取りのパターン(後藤, 1976)、発話分析(発話機能カテゴリー、育児語カテゴリー、擬音語擬態語の分類)を行った。

(2) 3歳児と乳児きょうだいとの遊び場面の発話調査については、3歳児と乳児きょうだいをもつ3組の家庭を対象に調査を行った。対象となった家族には事前に研究内容を説明し協力の承諾を得た。調査時期の対象児の年齢は、年上きょうだい3歳2か月～3歳8か月、年下きょうだい1歳0か月～1歳5か月であった。調査は、母親ときょうだいと遊んでいるところをビデオカメラで録画した。自由遊びの中で、絵本読み場面と手遊び歌場面を必ず入れてもらうように指示をした。絵本読み場面では、対象年齢が0～2歳である「いないいないばああそび」作: きむらゆういち偕成社、対象年齢が1～2歳である「だるまさんが」作: かがくいひろしプロンズ新社、対象年齢が0～3歳である「しろくまちゃんのほっとけーき」作: わかやまけんこぐま社を準備した。得られたデータから、3歳児の行動を行動コーディングシステム(Beco)を使用して、3つのカテゴリー(母親への視線、乳児への視線、笑い)の視点から分析した。手遊び歌場面では、遠藤(1998)や川村・井上・平井(1986)を参考に「げんこつやまのたぬきさん」「トントントントんひげじいさん」を行ってもらった。3歳児の行動を5つのカテゴリー(母親への視線、乳児への視線、絵本への視線、笑い、指差し)の視点から分析した。また、そのうち1組の家族については、3歳児の母親との遊び場面と乳児との遊び場面の比較検討を行った。得られたデータから、手遊びの歌と動作、手遊び歌の時間、視線の3つの視点から分析を行

った。

4. 研究成果

(1) 児童きょうだいの乳児への語りかけの縦断的調査について: 生後1か月から生後12か月頃までの弟への年上きょうだいの発話については、弟の行動や反応を促す注意喚起や情報提示、遊戯的音声、模倣・代弁が多くみられ、育児語の使用については、擬音語・擬態語、音韻反復、接尾辞の付加をつけることが多いことがわかった。特に言葉がまだ話せない弟への言葉かけには、遊戯的音声として、擬音語・擬態語(以下オノマトペ)を多く使用していることがわかった。そして、弟が有意義語を話しはじめた生後14か月頃から生後24か月頃までの年上きょうだいの発話については、絵本の場面では、動きを表現する擬音語擬態語を使用し、月齢があがるにつれ、動きだけでなく、動物や乗り物の鳴き声や音も表現していることがわかった。玩具を使った場面では、玩具の受け渡しや、ふり遊びを広げる発話、弟の動きや発話をまねる発話が出現していることがわかった。身体を使った遊び場面では、弟の動作や本人自身の動作に擬音語擬態語を使用していることがわかった。以上から、姉や兄の発話内容は、遊び場面や、弟の発達にあわせて異なる可能性が示唆された。

いないいないばあ場面: 児童とその年下きょうだい(生後7か月～生後20か月)の縦断的なデータを、視覚的消失の手段、視覚的消失と視覚的再現の間の「間」、視線、発話の視点から分析を行った。その結果、年上きょうだいは、視覚的消失の手段としては、手、カーテン、クッション、布団など身近なものを使っていることがわかった。次に、視覚的消失と視覚的再現の間の「ま」の取り方については、「視覚的消失と視覚的再現の間に発声のみられたもの」、「視覚的消失と視覚的再現の間に発声と行動のみられたもの」、「視覚的消失と視覚的再現の間に発声と行動のみられず「ま」が無いもの」の3パターンみられた。次に、視線については、きょうだいが顔や姿を隠しているときは、乳児の視線は終始きょうだいへ向けられていた。視覚的再現のときに互いが見つめ合って笑う姿がみられた。視覚的再現のときに互いが見つめ合って笑う姿がみられた。発話については、「音や動き」を表すオノマトペがすべての事例で表出された。オノマトペは、「視覚的消失の直前にオノマトペを使用する場合」、「視覚的再現の直前にオノマトペを使用する場合」、「視覚的消失と視覚的再現の両方の直前でオノマトペを使用する場合」の3パターンがみられた。「視覚的消失の直前にオノマトペを使用する場合」では、乳児は年上きょうだいの方を注目していたことから、きょうだい注意喚起の目的で使用していた可能性がある。「視覚的再現の直前にオノマトペを使用する場合」、「視覚的消失と視覚的再現の両

方の直前でオノマトペを使用する場合」では、乳児はきょうだいが見れたときに声をあげて笑ったり、発声と共に身体を動かしたりして喜んでいました。年上きょう代いは、視覚的消失と視覚的再現の間の「間」に、発声や行動などの工夫を凝らしていることがわかった。年下きょう代いを注意喚起する発声や、動作とともにオノマトペを発声し、乳児の期待感をさらに高めるような工夫をしていることがわかった。また、乳児の発達とともに、いないいないばあ遊びからかくれんぼ遊びへと変化し、相互交替的な遊びへと変化していくことがわかった。

ままごと場面：児童とその年下きょうだい（生後14か月～生後24か月）の縦断的なデータを、やり取りのパターン、発話（発話機能カテゴリー、育児語カテゴリー、オノマトペ）の視点から分析を行った。その結果、乳児の月齢があがるにつれ、きょうだい、乳児双方の働きかけからのスクリプトの構造が複雑化していくことがわかった。また、観察終了時では、主導的にスクリプトを構造化する主体が「年上きょうだい」から「乳児」へと変化していくことがわかった。1つのスクリプトの内容の特徴としては、単純な内容から複雑な内容へと変化していくこと。乳児は年上きょう代いの言動を真似る傾向にあることがわかった。年上きょう代いの発話については、全体期間を通して、「注意喚起・音声誘出」「情報提示・命名」「遊戯的音声」の使用が多く観察され、ままごと場面では、これら3種類の発話を中心に成立している傾向があることがわかった。また、発話機能カテゴリーの「遊戯的音声」、育児語カテゴリー「擬音語・擬態語」、オノマトペ「動き」「音・動き」は、行動とともに、繰り返し表出される傾向にあることがわかった。そして、年上きょう代いは、乳児の発達に合わせて、言動を変えていることがわかり、母親と同様の役割を担っている可能性が示唆された。

(2) 3歳児と乳児きょうだいとの遊び場面の発話調査：絵本読み場面：絵本の内容はよく覚えており、自分でセリフを作ることあつたが最後まで絵本を読むことができていた。いないいないばあの「ばあ」など、繰り返してでくる言葉や擬音語擬態語を読んだ時に母親や乳児の顔をみて、楽しさを共有しようとする姿が観察された。母親は言葉と表情で反応し、乳児よりも誇張した反応がみられるため、母親と目があう時に笑いがみられることもあつた。また、乳児は年上きょう代いが絵本を読み終わると指差しをして、絵本をもう一度読むよう要求する場面もみられた。手遊び歌場面：3歳児は、手遊び歌と動作を正確に覚えていることがわかった。対母親時、対乳児時とも、終始相手の顔をつめ手遊びを行い、笑顔がでていた。手遊び時間の長さについては、対母親時と対乳児時で異なることがわかった。対乳児時の場合は、

年上きょう代いの歌と動作が基準となり、乳児の手遊びの進行を誘導している傾向にあることがわかった。対母親時の場合は、母親が「間」をつくり、年上きょう代いの次の動作を誘導している可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計6件)

中川愛, 乳児と年上きょうだいとの間の快の情動共有について - いらないばあ遊びの分析 -, 日本発達心理学会第27回大会, 2016年4月29日, 北海道大学

中川愛, きょうだい間の遊びについての一考察 - 母親との遊びと比較して -, 日本保育学会第68回大会, 2015年5月10日, 相山女学園大学

中川愛, 1歳児きょうだいとの遊びに関する研究 - 絵本場面と手遊び歌場面に着目して -, 日本発達心理学会第26回大会, 2015年3月20日, 東京大学

中川愛, 児童の乳児きょうだいへの発話に関する研究 - 生後24か月までの家庭観察場面を通して -, 日本教育実践学会第17回研究大会, 2014年11月1日, 鳴門教育大学

中川愛, 0歳児きょうだいとの遊び場面における相互交渉 - きょう代いの発話に着目して -, 日本発達心理学会第25回大会, 2014年3月21日, 京都大学

中川愛, 児童の乳児きょうだいへの発話に関する研究, 日本教育実践学会第16回研究大会, 2013年11月2日, 岡山大学

〔図書〕(計2件)

中川愛, 子どもと遊び, 日本家政学会編吉川はる奈編集代表, 児童学辞典, 丸善出版株式会社, 2016, 194-195

中川愛, 3歳未満児の発達と保育内容, 大方美香・中西利恵編, 乳児保育 - 一人ひとりの乳児期の育ちを支えるために -, あいり出版, 2013, 50-55,

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 愛 (NAKAGAWA AI)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：25870430